

深噓

25年、二つの家庭を生きた男

長編小説



深噓

25 年、二つの家庭を生きた男

長編小説

本作について

本作は、提供された概要資料を着想源に、人物・関係性・出来事・会話を大幅に再構成したフィクションです。実在の人物、団体、地域、事件とは関係ありません。

目 次

序章 残高十二万八千円

第一章 完璧な夫

第二章 もう一冊の家計簿

第三章 日曜日の四十分

第四章 三人の娘

第五章 問い

第六章 冬美

幕間 家族写真の裏側

第七章 死蔵された金

第八章 息子

第九章 清算

第十章 結婚式の前夜

第十一章 孤独の部屋

第十二章 届かなかった手紙

終章 深嘘

序章 残高十二万八千円

* * *

その数字だけなら、何の変哲もなかった。

十二万八千円。月末の口座残高としては、むしろ少ない。だが美佐子は、そこに規則正しさを見つけた。

毎月二十五日。金額は十二万円から十五万円の間。振込先は「F・K」。摘要欄には、月によって「返済」「立替」「教材」「会費」とばらばらの文字が並んでいる。

夫の修一は、金に細かい男だった。結婚して三十一年、財布は別。住宅ローンと固定費は修一、食費と娘たちにかかる日々の出費は美佐子。互いの口座を覗くことは、夫婦の品位を下げる行為だと、いつの間にか決まっていた。

だから友人の真紀に「念のため通帳だけは見た方がいい」と言われた時、美佐子は笑った。

「うちに限って、そんな器用なことできる人じゃないよ」

言いながら、胸の奥で小さな棘が動いた。

器用ではない。それは本当だ。修一は靴下を裏返しに脱ぎ、冷蔵庫の麦茶を空にしても補充しない。娘の誕生日をスマートフォンの

通知で思い出す。なのに、二十五年以上、一度も途切れない送金だけは、驚くほど正確だった。

美佐子は三月分、二月分、一月分と指でさかのぼった。

十二万。十二万。十三万五千。十四万。十二万。

通帳のページをめくる音が、乾いた紙の音ではなく、どこか遠くで鍵が回る音に聞こえた。

そして、二十六年前の最初の一行にたどり着いた。

金額は七万円。

摘要欄には、たった二文字。

「生活」

美佐子はその場で、夫に電話しなかった。

問い詰めたら、何かが終わる。

何が終わるのかは、まだ分からなかった。

ただ、終わってしまうものの大きさだけは、紙の薄さに反して、両手では持てないほど重かった。

第一章 完璧な夫

* * *

修一は、近所では評判のいい夫だった。

休日の朝は七時に起き、家の前を掃く。自治会の防災訓練には欠かさず顔を出し、酒に酔って騒ぐこともない。三人の娘が小さかった頃は、日曜日になると車を洗い、買い物袋を両手に持った。

ただし、夕方四時を過ぎると時計を見る癖があった。

「会社に寄る。月曜の会議資料、机に置いてきた」

「今日、日曜だけど」

「誰もいないから仕事が進むんだよ」

美佐子は疑わなかった。働く男には、家族に見えない仕事があるのだと思っていた。

年に一度、修一は「地方の取引先の慰安会」と称して二泊か三泊の出張に出た。いつも梅雨が明ける頃だった。スーツではなくポロシャツを鞆に詰めるのを見て、美佐子は「ずいぶん気楽な出張ね」と笑った。

「相手が古い付き合いだから」

修一は照れたように言った。

その頃、美佐子は娘三人の予定で一日が埋まっていた。長女の真帆はピアノ、次女の沙耶は水泳、末娘の里奈は喘息気味で、夜中に救急外来へ走ることもあった。夫の出張先がどこかまで覚えてられるほど、暮らしは暇ではなかった。

修一は家族写真が好きだった。

七五三、入学式、運動会、成人式。必ず中央に立った。アルバムを開けば、父親としての彼には欠けたところがない。少し緊張した笑顔で娘の肩に手を置き、背後にはいつも同じ家の玄関が写っている。

だが、写真というものは、写っているものより、写っていないものの方が多い。

修一が日曜日の夕方に車で四十分離れた町へ向かい、別の駐車場に車を止め、別の家の玄関で「ただいま」と言っていたことを、美佐子はまだ知らなかった。

そこでは修一は、単身赴任の父親だった。

家には冬美という女と、陽介という少年がいた。

陽介は修一を「お父さん」と呼んでいた。

第二章 もう一冊の家計簿

* * *

美佐子は問いただす代わりに、調べることを選んだ。

自分でも意外だった。怒鳴りつけ、皿の一枚くらい割ると思っていた。しかし現実の入り口に立つと、人は劇的には動けない。知らない事実は恐ろしいが、中途半端に知った事実はもっと恐ろしい。美佐子は、答えを得る前に答えの形を整えようとした。

最初にしたのは、振込先の銀行支店を調べることだった。次に、過去の年賀状を箱から出した。修一の机の引き出しから、古い手帳も見つけた。

そこには奇妙な空白があった。

家族旅行の日程、娘の入学式、仕事の予定は細かく書かれているのに、毎月二十五日前後だけ、午後の予定がない。年に一度の「出張」の週には、会社名も訪問先も書かれていなかった。

真紀は黙って聞いていた。

「探偵を頼もうと思う」

美佐子が言うと、真紀はすぐには賛成しなかった。

「本当に全部知りたい？」

「知りたくない。でも、知らないまま今まで通りに暮らす方が、もっと無理」

その言葉に、美佐子自身が驚いた。

調査会社の事務所は、駅前の雑居ビルの五階にあった。壁には『浮気調査』『企業信用』『所在確認』と無機質な文字が並んでいた。

担当者の小野は五十代半ばの男で、感情を煽るようなことを一切言わなかった。

「期間を決めましょう。長くやれば費用は増えます。まず行動パターンを取ります」

「もし、相手がいたら」

「事実だけ報告します」

その一言で、美佐子は少し安心した。

感想はいらなかった。慰めもない。欲しいのは、夫がどこへ行き、誰と会い、何時に帰るのか。それだけだった。

半年後、美佐子は二冊目の家計簿を受け取ることになる。

それは金額の家計簿ではなく、時間の家計簿だった。

修一が二十五年間、どちらの家に何時間ずつ人生を配分してきたかを記した、恐ろしく正確な記録だった。

第三章 日曜日の四十分

* * *

最初の報告書は、拍子抜けするほど平凡だった。

土曜日、修一はホームセンターに寄り、灯油を買い、午後三時過ぎに帰宅。日曜日、午前中は美佐子とスーパーへ。昼食後にテレビを見て、午後四時十二分、自宅を出る。

そこからが、写真付きで続いていた。

四時五十八分。隣県の住宅街。修一は月極駐車場に車を停め、紙袋を持って歩く。

五時三分。築二十年ほどの二階建て住宅に入る。

八時四十一分。同住宅を出る。

美佐子は写真を何度も見返した。

玄関の脇に、自転車が二台。植木鉢。犬の形をした傘立て。どこにでもある家だった。

小野は説明した。

「周辺の聞き込みは慎重に行いました。ご主人は、ここでは長期の単身赴任をしている会社員という認識です。週末に帰ってくることもある、と」

「帰ってくる？」

「はい。つまり、こちらが本宅だと思われる可能性があります」

美佐子は笑ってしまった。

声が出た。乾いた、他人の笑いだった。

「じゃあ、うちは何なんでしょうね」

小野は答えなかった。

二回目の調査で、冬美の名前が分かった。三回目には陽介が二十五歳であることが分かった。会社員。未婚。修一との血縁関係を示す公的資料までは取れないが、近隣では親子として認識されている。

さらに奇妙なことが分かった。

修一は一年に一度、有給休暇を取り、冬美と旅行へ出ていた。美佐子には「地方出張」と説明していた日だった。

温泉旅館のロビー。並んで座る二人。

写真の修一は、美佐子が知っている修一より若く見えた。

笑っていた。

その笑顔を見て、美佐子は初めて泣いた。

不倫だからではない。

深嘘

自分の家で見せていた笑顔が、疲れた男の残り物だったのではな
いかと思ったからだった。

第四章 三人の娘

* * *

長女の真帆に最初に話したのは、五月の連休だった。

真帆は三十三歳。結婚を考えている相手がいた。披露宴の話が少しずつ具体的になっていた。

「お父さんのことで、話がある」

美佐子が言うと、真帆はすぐに顔色を変えた。

「病気？」

「違う」

病気なら、まだよかったのかもしれない。

美佐子は調査報告書を一冊だけテーブルに置いた。真帆は表紙を見て、数秒触れなかった。

「何、これ」

「お父さんには、もう一つ家がある」

真帆は笑わなかった。泣きもしなかった。

ページをめくり、写真を見て、最後まで読んだ。

「この人……誰？」

「冬美さん。たぶん、お父さんと二十五年以上一緒にいる」

「この男の子は？」

「二人の子供だと思う」

真帆は椅子から立ち上がった。窓のところまで行き、戻ってきた。そしてまた座った。

「私と、ほとんど同じ年じゃん」

声が震えていた。

次女の沙耶は怒った。

「殺してやりたい」

末娘の里奈は、何も言わずにトイレへ行き、十分戻らなかった。

三人に共通していたのは、母への同情より先に、自分の記憶を疑い始めたことだった。

運動会で肩車してくれた父。

受験の日に駅まで送ってくれた父。

就職祝いに腕時計を買ってくれた父。

あれは本物だったのか。

家族で食べた鍋も、初詣も、誕生日のケーキも、全部演技だったのか。

美佐子は言った。

「そこまで全部、嘘にしないでいい」

自分に言い聞かせるような声だった。

深嘘

「お父さんがしたことは許せない。でも、あなたたちが受け取ったものまで偽物にしたら、私たちの人生まであの人に持っていかれる」

真帆は母を見た。

「お母さん、強いね」

「違う」

美佐子は首を振った。

「強くなしないと、何も残らないだけ」

第五章 問い

* * *

修一を呼び出したのは、六月の土曜日だった。

場所は家のリビングではなく、ホテルの小さな会議室にした。美佐子、三人の娘、弁護士。そして修一。

修一は部屋に入るなり、全員の顔を見た。

「何だ、これ」

美佐子は封筒から写真を一枚出した。

冬美の家の前で、紙袋を持っている修一。

彼の顔から血の気が引いた。

「説明して」

修一は写真を見つめたまま、しばらく何も言わなかった。

やがて、最初の嘘をついた。

「昔の知人だ」

沙耶が机を叩いた。

「二十五年、毎月金を振り込む知人って何？」

修一は眉を寄せた。

「昔、借金があって」

「二十五年返す借金？」

「色々あるんだ」

「その息子は誰？」

真帆の一言で、修一は黙った。

次に、二つ目の嘘をついた。

「俺の子かどうかは分らない」

美佐子は、その瞬間に理解した。

修一の嘘には順番がある。まず存在を小さくする。次に過去へ押し込む。逃げられなくなると、自分の責任だけを曖昧にする。

「じゃあ、DNA 鑑定すればいいね」

美佐子が言うと、修一は初めて彼女を見た。

「そこまでやるのか」

「そこまでやったのは、あなたでしょう」

修一は椅子にもたれた。

そして三つ目の嘘をついた。

「生活費はちゃんと渡してきた。お前たちに迷惑はかけてない」

里奈が泣き出した。

「迷惑かけてないって、何？」

小さな声だった。

深嘘

「私、毎年お父さんの誕生日に何をあげるか考えてた。あっちでも同じことしてたの？」

修一は答えなかった。

嘘が一枚ずつ剥がれていくたび、その下から真実が現れるのではなく、さらに深い嘘が出てきた。

美佐子はそれを見ながら、この男は二十五年間、嘘をついてきたのではないと思った。

嘘の中に住んできたのだ。

第六章 冬美

* * *

冬美から連絡が来たのは、それから一週間後だった。

知らない番号からだった。

「奥様でしょうか」

低く、落ち着いた声だった。

「冬美です」

美佐子は息を止めた。

怒鳴る言葉ならいくらでも考えていた。人の夫を二十五年奪った女。家庭を壊した女。だが電話の向こうの声は、予想していたより疲れていた。

「一度、お会いできませんか」

二人は駅から離れた喫茶店で会った。

冬美は美佐子より二歳年下だった。派手ではない。薄いグレーのカーディガンを着て、何度も水を飲んだ。

「私も、全部を知っていたわけではありません」

美佐子は黙っていた。

「奥様と娘さんがいることは、最初から知っていました」

「それで？」

「離婚するって言われました」

ありふれた台詞だった。

「何年待ったんですか」

「二十五年です」

冬美は笑わなかった。

陽介が生まれた時、修一は泣いたという。住民票を移せない理由を仕事の事情で説明し、近所には単身赴任だと話した。父親参観には都合をつけ、卒業式にも来た。冬美の母が亡くなった時には喪主の横に立った。

「私は、奥様の家を壊して自分が妻になるんだと思っていました。でも途中から、そうじゃないって分かっていた」

「じゃあ、なぜ続けたの」

冬美は長い間、答えなかった。

「息子から父親を奪うのが怖かったんです」

美佐子は、胸の奥に湧いた言葉を飲み込んだ。

その理屈を受け入れることはできない。だが理解できないとも言い切れなかった。

「私も、同じだったのかもしれない」

美佐子が言った。

「何がですか」

「見たくないものを見ないことで、娘たちから父親を守ってるつもりだった」

冬美は顔を上げた。

二人の女の間に友情は生まれなかった。

許しもなかった。

ただ、同じ男の嘘によって、別々の方向から同じ穴へ落ちた者同士の、奇妙な静けさだけが残った。

幕間 家族写真の裏側

* * *

修一には、写真を二枚焼く癖があった。

美佐子は長い間、それを几帳面な性格だと思っていた。一枚はアルバム、もう一枚は「会社の机にでも置くんでしょう」と笑っていた。

実際には、二枚目の多くは捨てられていた。

冬美の家に、美佐子たちの写真を持ち込むわけにはいかない。逆も同じだった。

修一のスマートフォンには、家族ごとに別のフォルダがあった。名前は付けず、「A」「B」。位置情報は切り、写真の共有設定は使わない。誕生日は会社の予定表に偽装して登録していた。

それは偶然の積み重ねではない。

二十五年という時間は、行き当たりばったりでは乗り切れない。

修一は、嘘を続けるための技術を学び、失敗するたびに修正していた。

携帯電話が普及すれば通知を消し、家族共有のカレンダーが当たり前になれば別の端末を持った。キャッシュレス決済が増えると、冬美の家の近くでは現金を使った。

文明が便利になるたび、修一の嘘は少しだけ不便になった。

それでもやめなかった。

止めるには、どちらかを失わなければならないと思っていたからだ。

だが、彼が本当に恐れていたのは、家族を失うことだけではなかった。

「立派な父親である自分」を失うことだった。

修一は二つの家で、それぞれ違う自分を演じていた。しかし、どちらも本人だった。

そこが、この話を単純な悪人譚にしない。

美佐子は後に弁護士から言われた。

「長期間の二重生活では、本人が自分の虚構を現実だと思い込むことがあります」

美佐子は答えた。

「思い込んだからって、現実になるわけじゃないでしょう」

それは正しい。

同時に、少しだけ違うとも思った。

深嘘

修一が作った二つの家庭は、確かに存在した。そこで育った子供も、交わされた会話も、食べた夕食も、全部現実だった。

嘘から始まったものが、長い時間を通るうちに、現実の重さを持ってしまった。

だから壊す時、全員が血を流した。

第七章 死蔵された金

* * *

金の流れを洗うと、修一の言った「生活費を渡しただけ」という説明は崩れた。

送金は毎月の生活費だけではなかった。陽介の学費、車の購入費、住宅修繕費、保険料。さらに、冬美名義の口座へ複数回にわたり大きな金に移されていた。

総額を見た沙耶は、声を失った。

「これ、私たちの家の貯金じゃないの？」

夫婦の共有財産から出ていた金が含まれていた。

修一は「自分が稼いだ金だ」と主張した。

弁護士は淡々と説明した。

「婚姻中に形成された財産は、名義だけで決まるものではありません」

修一は不機嫌そうに椅子を揺らした。

それでも彼は最後まで、自分を悪人だとは認めなかった。

「向こうだって生活がある。俺が見捨てたらどうなる」

美佐子は聞いた。

「こっちは？」

「だから、ちゃんとやってきただろ」

「何を？」

「父親として。夫として」

修一の声には、本気の困惑があった。

美佐子はそこに、この事件の一番深い部分を見た。

彼は二つの家庭を欺いた。しかし同時に、二つとも守ってきたと思いついていた。家族を愛していなかったのではない。愛情と所有を区別できなかったのだ。

誰も失いたくない。

誰からも悪く思われたくない。

だから、全員に必要なだけの真実を与え、残りを隠した。

修一にとって嘘は、裏切りではなく管理だった。

家計と同じように、時間と愛情を配分し、破綻しないよう収支を合わせてきた。

だが二十五年かけて積み上げた帳簿には、ひとつだけ計上されていないものがあった。

信頼だった。

第八章 息子

* * *

陽介は、父を恨んでいなかった。

少なくとも最初は。

修一から「事情が複雑になった」と聞かされても、何のことか分からなかった。母の冬美に問い詰め、初めて自分の父に別の妻と三人の娘がいることを知った。

「知ってたの？」

「あなたが小さい頃から」

その答えで、陽介の世界は裏返った。

自分だけが騙されていたわけではない。自分の存在そのものが、誰かを騙す材料になっていた。

父とキャッチボールをした公園。学校の進路相談。大学の入学式。全部が、別の家族に対する嘘の予定と表裏になっていた。

陽介は修一に会った。

「俺、向こうの人たちに謝った方がいいのかな」

「お前が謝ることじゃない」

「じゃあ、誰が謝るんだよ」

修一は黙った。

「父さん、俺のこと好きだった？」

「当たり前だろ」

「じゃあ、何で隠したの」

「お前を守るためだ」

陽介は笑った。

「それ、向こうの娘さんにも言ってる？」

修一の顔が固まった。

陽介はその日、初めて父の正体を見た気がした。

悪魔ではない。

冷酷な詐欺師でもない。

ただ、誰かに嫌われることを異常に恐れ、その恐怖を愛情と呼び
替え続けた男だった。

「俺、しばらく会わない」

「何でだ」

「父さんと会うと、俺まで嘘の中に戻る気がする」

その言葉を聞いた修一は、初めて泣いた。

しかし陽介は慰めなかった。

父が泣く姿を見ながら、自分の二十五年もまた、父の事情によっ
て書き換えられてしまったのだと知った。

深嘘

第九章 清算

* * *

離婚協議は、修一が考えていたより速く進んだ。

美佐子は復縁の条件を出さなかった。

再構築という言葉も使わなかった。

「二十五年前なら、やり直すことを考えたかもしれない。でも、
今からあなたの言葉を一つずつ疑って生きる時間は、私には残って
いない」

修一は「別れたくない」と言った。

「じゃあ、冬美さんと陽介さんを切るの？」

「それは……」

「できないでしょう」

「責任がある」

「私たちには？」

同じ問答を何度も繰り返し、最後に修一は黙った。

慰謝料、財産分与、共有財産から流出した金の精算。冬美との関係についても別途協議が行われた。双方の代理人を通し、以後、家族間で直接連絡を取らない条項が盛り込まれた。

美佐子は金額そのものに執着していたわけではない。

だが、曖昧に終わらせたくなかった。

修一は二十五年間、曖昧さを味方につけてきた。家族と知人、出張と旅行、借金と生活費、責任と愛情。その境界をぼかし続けたから、二つの人生を同時に持てた。

だから最後だけは、線を引く必要があった。

これは妻。

これは不倫相手。

これは共有財産。

これは損害。

これは終わった関係。

紙に書かれた言葉は冷たい。だが冷たさには救いがある。

あるものを、あると決める。

ないものを、ないと決める。

それは嘘の反対側にある作業だった。

署名の日、修一はペンを持ったまま言った。

「本当に、これで終わりか」

美佐子は答えた。

「終わるんじゃない。やっと本当の時間が始まるの」

第十章 結婚式の前夜

* * *

真帆の結婚は、一度延期になった。

「うちのこと全部話したい」

婚約者の大輔に対し、真帆はそう言った。

美佐子は止めた。

「あなたの結婚に、お父さんの罪まで持っていかなくていい」

「でも後から知られる方が嫌」

真帆は譲らなかった。

大輔とその両親に話す日、美佐子も同席した。

真帆は震えながら、父に長年別の家庭があり、婚外子がいること、両親が離婚することを説明した。

話し終わると、部屋に沈黙が落ちた。

大輔の母が最初に口を開いた。

「真帆さん、それを話すの、怖かったですでしょう」

真帆の目から涙が落ちた。

「すみません」

「あなたが謝ることじゃないわ」

大輔の父も頷いた。

「家族になる前に大事な話をしてくれて、ありがとう。あなたを心から迎えます」

その言葉を聞いた時、美佐子は二十五年間、自分たちが何に怯えていたのか分からなくなった。

世間。

恥。

家族の形。

噂。

修一もまた、それらを恐れていたのかもしれない。だから真実を言えなかった。だが真実を言わなかったことで、失うはずのなかったもののまで失った。

結婚式の前夜、真帆は母に言った。

「お父さん、来ないんだね」

「呼びたかった？」

「分からない」

「分からなくていいよ」

美佐子は娘の髪を撫でた。

父親を憎むことと、父親との思い出を惜しむことは、矛盾しない。

人の感情は判決文ではない。

白黒に分けられないからこそ、家族なのだと、美佐子はようやく
思えるようになっていた。

第十一章 孤独の部屋

* * *

修一は駅前のワンルームに移った。

家具は最低限だった。ベッド、テーブル、電子レンジ、小さな冷蔵庫。

二つの家を行き来していた男が、最後には一人分の部屋に収まった。

最初の頃、修一は毎晩スマートフォンを手にした。

美佐子に連絡しようとして、やめる。

娘に謝ろうとして、やめる。

冬美に電話しようとして、やめる。

陽介の名前を開いて、閉じる。

「直接連絡を控える」という取り決めは、彼にとって罰というより、鏡だった。

自分の言葉が届かない場所で、それぞれの人間が自分拔きの生活を始めている。

修一は初めて、自分が家族をつないでいたのではなく、家族の中心に自分を置いていただけではないかと考えた。

休日、スーパーで一人分の惣菜を買う。

以前なら美佐子家で夕食を食べた後、「ちょっと出る」と言い、冬美の家で果物をつまんだ。

二軒分の食卓が、いつでも自分を待っていた。

今は、誰も待っていない。

ある夜、修一はノートを買った。

一ページ目に、これまでついた嘘を書き始めた。

出張。

借金。

残業。

単身赴任。

会議。

仕事のミス。

返済。

列はすぐに埋まった。

しかし途中で手が止まった。

本当に恐ろしいのは、嘘の数ではなかった。

嘘をつくたび、誰かを傷つけているという感覚が薄くなっていったことだった。

修一はノートの最後に一行だけ書いた。

深嘘

「俺は、全員を失わないために、全員を失った」

その夜、彼は誰にも送らないまま、初めて「すまなかった」と口にした。

第十二章 届かなかった手紙

* * *

離婚から半年ほどたった頃、美佐子のもとに一通の封筒が届いた。

差出人は修一だった。代理人を通して転送されたもので、直接の連絡ではない。

美佐子は三日間、開けなかった。

謝罪なら、もう聞いた。言い訳なら、もっと聞いた。紙一枚で二十五年が軽くなることはない。

それでも四日目の夜、封を切った。

手紙には、意外なことに許しを求める言葉がほとんどなかった。

「自分は二つの家庭を守っていたつもりだった。しかし、守っていたのは家族ではなく、自分が必要とされているという感覚だったのだと思う」

そこまで読んで、美佐子は一度手紙を伏せた。

修一が初めて、自分の行為に名前をつけようとしているように見えた。

「美佐子が仕事を辞めず、娘たちを育て、家を守ってくれたから、私は外でもう一人の父親を演じる余裕を持てた。私の二重生活は、私一人の能力で成立したのではない。あなたが築いた生活を土台にしていた」

その部分には、妙な正確さがあった。

美佐子は怒りより先に、疲労を覚えた。

ようやく気づいたのか、と。

手紙の最後に、修一はこう書いていた。

「返事はいらない。返事を求めること自体が、また自分の都合だと分かった」

美佐子は便箋を折り、封筒に戻した。

破りもしなかった。保存するつもりもなかった。

翌朝、資源ごみの紙袋に入れた。

捨てるという行為は、憎しみではなかった。

もう自分が受け取る必要のないものを、自分の生活から出すだけだった。

終章 深噓

* * *

一年後、美佐子は小さな部屋に引っ越した。

以前の家より狭い。けれど、朝の光がよく入った。

三人の娘たちは、それぞれの生活へ戻った。真帆は結婚し、沙耶は仕事で海外へ行くことになり、里奈は週末になると母の部屋へ来て、勝手に冷蔵庫を開けた。

冬美とは会っていない。

陽介とも会っていない。

それでいいと思っている。

同じ被害を受けたからといって、家族になる必要はない。理解できる部分と、どうしても許せない部分が同時にある。それもまた真実だった。

ある日、美佐子は古いアルバムを整理した。

修一が写っている写真を全部捨てようと思っていた。

だが、できなかった。

真帆の七五三。沙耶の運動会。里奈の入学式。写真の中で娘たちは笑っている。

その笑顔まで捨てる理由はない。

美佐子は修一だけを切り取ることもしなかった。

写真は写真のまま、箱に戻した。

過去を書き換えるのをやめたのだ。

修一の嘘は深かった。

ひとつの嘘を隠すために次の嘘をつき、その嘘を守るために日常そのものを設計した。やがて嘘は言葉ではなく、家、通帳、予定表、家族写真、誕生日、旅行、仕事、近所付き合いにまで染み込んだ。

深い嘘。

美佐子はそれを「深嘘」と呼ぶことにした。

深嘘の怖さは、真実を隠すことではない。

長く続けば、人は嘘の中でも笑い、祝い、育ち、老いることができる。だからこそ、嘘が暴かれた瞬間、何が偽物で何が本物だったのか分からなくなる。

けれど、一年かけて美佐子はひとつだけ確信した。

騙された時間が、失われた時間とは限らない。

娘を育てた日々。働いた日々。泣いた日、笑った日。誰かを信じていた自分まで否定する必要はない。

真実は過去を救ってはくれない。

深嘘

ただ、これから歩く道を一本にしてくれる。

夕方、真帆から写真が届いた。

生まれたばかりの赤ん坊を抱いている。

「お母さん、今日退院したよ」

美佐子は画面を見つめ、しばらくして返信した。

「おかえり。家族みんなで待ってるよ」

送信ボタンを押した後、窓を開けた。

夏の終わりの風が、カーテンを大きく揺らした。

もう、誰かの帰宅時間に合わせて時計を見る必要はない。

もう、知らない予定に心を削る必要もない。

深い嘘の底から出た世界は、少しまぶしかった。

美佐子は目を細め、それでも窓を閉めなかった。

了